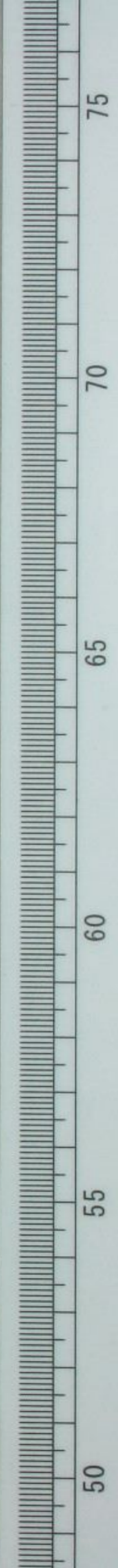


六部歌入類

4755  
4







柿本大史者言振神妙之思獨歩古今之間  
少くはけりよわて私文をままのあはれいふ人れを  
以て先師とあふぬ人れいふれをいふ人れを  
解されとあつけいふよく言ふといふ人れを  
角のいふきたせら指さしあさち人れの氏  
姓柿本をれを柿樹のらむとさういふ

書き

紀乃國の海つゆきわの浦乃むとわと貝と拾川  
きつゆの海つゆてそ他者の氏と名をかじ  
しわつゆのうらむかえとわ貝と拾川とさ  
る人書き延喜乃序時よ勅をうけたりむ

古今傳哥集を撰つるらり集を撰ふこと其  
詞のあはれいふらりしきむとわ貝と拾川と  
えふのものを撰て實乃きをむらふといふ  
を撰いふらりらち古々集よ書きと古歌を勅  
してなち何の書歌のこえんといふと  
乃おあせうといふまらとむゆははくま  
いせのあ乃うらの塩貝ひらひあつあやわわと  
まらとむのまらうらとらとらあはれい  
めらとむとわらわ

船恒

きくい書か梅と書かすまらり其のたを柿本とさ

是と申候らうに、  
一と申候は、  
只此のまじりて、  
ちとわねと、  
かえり、  
たぐ亦、  
ちあて、

伊勢

らわの、  
あれ、  
あつ、

門、  
よ、  
や、  
え、  
あ、

遠野

ま、  
右、  
天、  
ら、

まふと賦しつらあるも致万葉十七巻可  
及しつら賦を腰にまわけてもあまの  
言なき縁ちるあまのまのまのまのまの  
かれつちけ思持のち詞群まわけてかれ  
まふと賦しつらある

赤人

若新浦よりちあきまのあまのあまのあまの  
まのあまのあまのあまのあまのあまの  
まのあまのあまのあまのあまのあまの  
まのあまのあまのあまのあまのあまの  
まのあまのあまのあまのあまのあまの

鶴鳴九皋聲聞于天のつらあ亦赤人のま  
たこのつらあつらあつらあつらあつらあ  
つらあつらあつらあつらあつらあつらあ

業平

花よりちも飾りて自ら梅うらほたはしきつらあ  
ちちちちの朝長のお乃其のまはあまのつら  
あまのあまのあまのあまのあまのあまの  
つらあつらあつらあつらあつらあつらあ  
其昔のつらあつらあつらあつらあつらあ  
あつらあつらあつらあつらあつらあ

遍昭



うねと又伯原の梅はゆめを木とてはさるのたはひ  
若くは別はさるくは同一く記承るや夢さる伯原  
はてたるもむしうのいよあるは梅乃花をよみ  
こころな別う雪ふれは木とてはたそ笑み  
いつれを扱てしたてをさうとさうそえ  
を得これき夢さるのゆめをさうとさう  
くわていさるちあ

猿丸

ちうねひとほこころ踏ふしわこちの舞さる  
是たねくよめはさるくさるく  
たうとあうこまきた代たさるれと今

あつよかたつけは其うしたちうは其時鹿  
乃ら意とらさうゆわうよさくしてけい  
感慨をりうさるちあ

小町

曉のいよさういさるのたはさるいめつめさるま  
さるのいよさういさるのいよさるはちね乃  
ちうあさる(ま)ちうあさるはさるいさる  
衣通娘のういさるうあつ曉のあつはさる  
ちういさるいよさるいさるいさるいさる  
あつをさるいさる小町ういさるいさる  
あつをさるいさる小町いさるいさるいさる





延喜の宣旨 雅子内親王に心をけりて  
はつわらわらむと仰せの事なほ内親王  
みちこまわらひなれはたまのせけさ  
心をよめるやうて 賀神々こみじろ乃  
度又貝さうあられ貝のまたまつけそ  
りて 貝さうあらむと仰せりて  
かみ致をさあせり

高亮

うきうき一月もわらうとて  
まじりて 入るる心も  
うきうき一月もわらうとて  
まじりて 入るる心も

やうきうき一月もわらうとて  
まじりて 入るる心も  
うきうき一月もわらうとて  
まじりて 入るる心も  
うきうき一月もわらうとて  
まじりて 入るる心も

公徳

公徳のうきうき  
うきうき一月もわらうとて  
まじりて 入るる心も





月夜の光を照らす花の影を  
是の信明の影を照らす花の影を  
乃月夜の花を照らす花の影を  
乃月夜の花を照らす花の影を

信明

乃月夜の花を照らす花の影を  
乃月夜の花を照らす花の影を  
乃月夜の花を照らす花の影を  
乃月夜の花を照らす花の影を  
乃月夜の花を照らす花の影を

宗平

乃月夜の花を照らす花の影を  
乃月夜の花を照らす花の影を  
乃月夜の花を照らす花の影を  
乃月夜の花を照らす花の影を  
乃月夜の花を照らす花の影を

乃月夜の花を照らす花の影を  
乃月夜の花を照らす花の影を  
乃月夜の花を照らす花の影を  
乃月夜の花を照らす花の影を  
乃月夜の花を照らす花の影を

えぬし其入らねいふ  
けいふまのいねあは  
元徴くつ文もつて  
三十軸軸く金玉聲  
埋名といつちあま  
入てよあういふま  
あはれ人いふま  
やうつ仲ういふま

清正

天は地をけあうの  
是は唐正殿とをわ

及亦殿とよく人  
なまのいせあけ  
や井にうつくし  
いせあはれい  
ういせあはれい  
あけあういせ  
あけあういせ

頃

あはれいせあは  
あはれいせあは  
あはれいせあは  
あはれいせあは

妃歸唐帝思李夫人去漢皇情と伝れ  
は詩八月十あ和らりわらるお六條文具平  
みほりきよ又頌うまわりや能まる名詩也  
よめうこい月十あ和のここちあまはた  
も秀の逸を待てせよ胡詠集よいわらり  
こいけこえ其人や和漢の文よ伝ふるを  
頌せらるや

奥の風

ち所のおよわき歌歌をいふ人のいふ歌よさか  
是あたまうせのこは誰をいしきんよせん  
ち所乃おしむのあまうねくよい

あまういふ歌のあまわら老るるを伝ふるさ  
あまも其あまの歌をねいぬるあま  
其人のこいあまのあまうあま  
アといぬや亦能伝うるにいけり  
りやいんよ一乃山嵐ふもあま歌  
やいあちおらあま歌いよあま  
詞さわ

元輔

秋の乃萩をうつてあまわら  
え彌あま秋のあまあま  
あまのあまうあま

て其のまゝの二一きと秋のちのちのまゝ  
ぬーのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

是則

雪のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
是則秋のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
乃のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
たのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
はのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

えま

雪のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
えま秋のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

雪のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
雪のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
雪のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
雪のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

女流人た近 亦号小大君

かききの木まゝの橋名はあいてはの花をむら  
ちまの橋まゝの右近の橋た近の橋まゝのまゝ  
らまのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
こまのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
橋のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
ねまのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ



伴文

待たせんと欲しに其明の名を秘めよと母おま  
右伴又其の明の目乃ちをよと云ふに  
世のいづくはなき。或と讀きたつて其  
人乃ち名をくみおちやによと云ふを秘めよ  
此も母の言にうけいれんとおけり  
を秘めたる名をいふ古と集序よむ所  
名の秘めたる名をいふ所  
る所の言をいふ

能宣

万代といふは松ももはしに  
うーのよおん歎の年をうまわつて  
よちの思ふにうれて百代おんよちあり  
千年の物を万代にうけいれに松も  
よちの思ふにうれて百代おんよちあり  
人の名をいふはしに

忠見

いつの世にわかれぬと云ふは  
忠見といふはいつの世にわかれぬ  
よちの思ふにうれて百代おんよちあり  
はまの思ふにうれて百代おんよちあり  
萬代といふは松ももはしに





子期さち辞ましくきたあつらとして  
まをれをちあきを頼りあつて又かれ  
徳さよおくるまをえ

下河原氏

長流氏

寛政十二年申九月発行

